

文献案内

(L は文献参照を意味する)

ライプニッツの世界に足を踏み入れるための読書情報は、簡単であると同時に難しい。簡単だという理由は、最良かつもっとも直接的なアクセスが、インターネットで次のサイト (<https://leibnizedition.de/>) からアカデミー版 (die Akademieausgabe der Leibniz-Edition) を見ることだからだ。歴史批評的なこの版の巻は、デジタル化されたりスキャンされたりした部分については、前述のサイトから直接、無料で閲覧できる。印刷版はデグロイター社から入手可能。いっぽうでアクセスが難しいという理由は、アカデミー版のライプニッツのテキストが原文 (大半はラテン語もしくはフランス語) でしか読めないからだ。ただ、非常に情報に富んだ序文が、それぞれの巻についてのすぐれた洞察と概要を提示している。全巻の序文を総合すると、少なくともアカデミー版でカバーしている年については (現在のところ、同版はライプニッツの生涯の最後まで達してはいない)、ライプニッツの生涯と業績に関するドイツ語による最良の研究書と言えるだろう。

ライプニッツのテキストのドイツ語訳は、おおかたが哲学に関連する書簡や著作の一部に限られている。簡単に手に入りやすいのはたとえば、ズーアカンフ社のペーパーバックから出版された4巻本で、ハンス・ハインツ・ホルツとヘルベルト・ヘリングが編集と翻訳を行っている。そのほかには、エルンスト・カッシーラーが編集、アルトゥール・ブーヘナウが翻訳をしたマイナー社発行の4巻版もある。ライプニッツの数学的論文に関しては、ハインツ＝ユルゲン・ヘス (Heinz-Jürgen Heß) とマルテ＝ルドルフ・バビン (Malte-Ludolf Babin) によるドイツ語訳が (L)、そして歴史に関する著作選集に関しては、マルテ＝ルドルフ・バビンによるドイツ語訳が秀逸とされる (L)。ライプニッツに対するもっとも手厳しい批判は、彼の思想の通俗化への批判——たとえばヴォルテールの『カンディード』のような——ではなくライプニッツ本人に向けられたものについては、ドイツ語の薄いレクラム版 (L) で入手できる。ライプニッツについて手早く簡潔に知りたい人には、ローヴォルト社の評伝シリーズ *rororo* から出ているラインハルト・フィンスターとゲルト・ヴァン・デン・ホイフェルによる入門書を読むことをすすめる。ライプニッツの生涯と業績についてのより詳細で読みやすい説明としては、アイケ・クリスティアン・ヒルシュ (Eike Christian Hirsch) (L) とマリア・ローザ・アントニヤツァ (Maria Rosa Antognazza) (L) による伝記がある。

ライプニッツの研究文献というほぼ無限の宇宙をさらに深く探究したい人は、まず覚悟

を決め、第二に自身の手引書を見つける必要があり、そして第三に——あくまで私の主観的評価だが——次にあげる本から始めるとよいだろう。1974年にデ・グロイター社から出版されたすでに古典であるアーロン・グルヴィッチ著“Leibniz. Philosophie des Panlogismus (ライプニッツ、汎論理主義の哲学)”やズーアカンフ社からペーパーバックを出ているジル・ドゥルーズの“Die Falte. Leibniz und der Barock”(『襞：ライプニッツとバロック』宇野邦一訳、河出書房新社)(こちらも古典であり、異論はあるものの、新鮮で刺激的な作品である)。そしてさらに鋭く分析的にも奥深いシビル・クレーマー(Sybill Krämer)の“Berechenbare Vernunft(計算可能な理性)”(L)や、興味深い美術史的視点を備えたホルスト・ブレデカンフの“Die Fenster der Monade: Gottfried Wilhelm Leibniz’ Theater der Natur und Kunst(モナドの窓：ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツの自然と芸術の劇場)”(2004年刊。2020年に第3版。デ・グロイター社)などもある。ライプニッツの「二人のゾフィー」に関しては、王妃ゾフィー・シャルロッテについてはバルバラ・ボイス(Barbara Beuys)による伝記をすすめる(L)。選帝侯妃ゾフィーについては、ドイツ語に翻訳されたライプニッツとの往復書簡(リー・ウェンチャオが編集、ゲルダ・ウターメーレン(Gerda Utermöhlen)とザビーネ・ゼルショップ(Sabine Sellschopp)がドイツ語に翻訳)をすすめる(L)。選帝侯妃ゾフィーと学者ライプニッツが交わした書簡は、バロックの——飾り気も素顔もあわせもつ多様な——宮廷文化の世界を、政治と道徳、数学と形而上学、雑談と噂話など、あらゆる側面からあきらかにする。